

成人初期女性のキャリア変更過程

— 社会人経験を経て大学・大学院に再入学した女性を対象に —

吉川 浩美・田中 奈緒子

Career change process of young adult women

Hiromi YOSHIKAWA and Naoko TANAKA

Process of career change in young adult women was investigated through an interview survey. Our research questions were as follows. (1) How do women advance through career changes, (2) How do women form an occupational identity, and (3) Why do women change their careers. Participants (n = 6: range, 26 to 34 years) were single women that returned to undergraduate or graduate education after a period of employment. We interviewed the participants about the episode "Career change" and data were analyzed by using the modified grounded theory approach. Results indicated that the participants were dissatisfied with their situation and desired a different lifestyle and a new career. At the time, they hesitated but wanted to persevere. In addition, they returned to university education through the support, or because of pressure from important others. It is concluded that these women were responding to the reality of their situation.

Key words : young adult women (成人期初期女性), career change (キャリア変更),
Modified Grounded Theory Approach (修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ),
occupational identity (職業アイデンティティ)

問題と目的

現代女性の生き方の選択肢は多様化した。これは魅力的な変化である一方、新たな迷いや焦燥を生んでいる。学校卒業後、社会人となってから30代前半までの時期には、女性の生き方に深くかかわるいくつもの出来事が出現する。厚生労働省「人口動態統計」(2010)によると、平成21年における女性の平均初婚年齢は28.6歳であり、都道府県別で最も高い東京都では29.7歳となっており、30歳前後は結婚という大きなライフイベントが起こる時期となっている。女性は仕事を継続していくか、結婚までのものか考えるか、また結婚をするかどうか、子どもを産むかどうか、といった様々な選択を迫られ、それぞれの選択につきまとう危機を絶えず体験し、その都度アイデンティティ(自分らしさ)の問題と向き合うことになる(松下, 2002)。

Levinson (1978, 1996) は、30歳前後の時期を「30歳の過渡期」と命名し、重要な転換点(30歳代の危機)であり、ストレスが増大する時期であるとした。福田・松島(2006)はこの「30歳の過渡期」に着目し、現代社会においてもこの時期がアイデンティティ確立にとって重要な時期であるとした。特に、女性の場合は、前述したように結婚、出産などによって、しばしば職業アイデンティティの形成において中断や停滞が生じ、アイデンティティ全体の統合が揺らぐことが予想される。職業アイデンティティの形成は、就労自体によるのではなく、職業そのものやその時選択し従事している職業を個人が自分の人生全体に対して、どのように位置づけ、意味を与えているかによる影響を受けるとされることから(鱈・宮下・岡本, 1998)、キャリア変更は職業の意味づけを再検討したひとつの結果であると考えられる。

そこで、本研究では、30歳前後の未婚女性が

どのような経緯でキャリア変更をしていくのか、そこで見られる職業アイデンティティ形成のプロセスを明らかにしていくことを目的とする。なお、本研究においては、キャリア変更のため大学(院)に再入学した者に焦点をあてる。研究にあたり、以下のリサーチクエスチョンを設定した。

- ① キャリア変更のプロセスはどのようにして進むのか
- ② その過程を通して、どのように職業アイデンティティを形成していくのか
- ③ なぜキャリア変更をするのか

方法

1. 対象者および倫理的配慮

正社員の社会人経験を経て専門職(心理・医療領域)に就くために大学・大学院に再入学した30歳前後の未婚の女性を対象とした。正社員の社会人経験を経て、としたのは、キャリア変更の意志がより明確な者を抽出するためである。対象者に対しては、研究に関する説明書を用いて、研究の目的、方法、拒否の権利、プライバシーの保護、結果の公表について説明し、研究への同意の確認後、同意書に署名を依頼し承諾を得た。

対象者8名のうち、テープ録音の承諾が得られなかった者とキャリア変更を意図せず再入学した者を除く6名を分析対象者とした。年齢は26歳～34歳、社会人経験は2年～8年、現在の大学(院)の学科・専攻は心理学3名、作業療法1名、言語

聴覚療法1名、看護1名であった(Table 1)。

2. 面接の実施時期と手続き

2007年7月～11月の間に対象者と1対1の面接を行った。面接方法としては、エピソードインタビューを採用した。エピソードインタビューとは、データとしてナラティブを集めようとする技法のひとつである。ナラティブ・インタビューと半構造化インタビュー両方の長所を生かすことを目指し、調査対象者にとって意味のある経験への通路としてエピソード(本研究では「キャリア変更」)に焦点を当てることによって、状況と結びついたより細かいナラティブにアプローチが可能となるため(Flick, 1996)、このインタビュー法を用いた。具体的には、「現在、大学(院)にいますが、最初の大学卒業時の就職活動から、就職して、退職して、大学(院)に入って、現在に至るまでのことをできるだけ詳しく話してくださいませんか」とし、語ってもらった。語りの途中では口出しをせず、相槌を打つのみとし、一通り語っていただいた後、十分に語られていなかったところや曖昧なところなどについて質問した。最後に、職業観の変化、人生展望の変化、自身のキャリア変更についてどのように捉えているかについて尋ねた。面接時間はそれぞれ1時間半程度であり、面接内容は対象者の了解を得て録音し、逐語録としてまとめた。また、面接は、対象者の意向に沿い、彼女らが在籍する大学の教室や近隣の喫茶店で行い、その際には、落ち着いて面接できるよう

Table 1 分析対象者一覧

| | | No.1 | No.2 | No.3 | No.4 | No.5 | No.6 |
|--------|-------|-------------------|-------------------|---------------|---------------|---------------|------------------|
| 再入学先 | 学科・専攻 | 心理学専攻 | 心理学専攻 | 心理学専攻 | 言語聴覚療法学科 | 作業療法学科 | 看護学科 |
| | 学年 | 修士2年(学部3年編入) | 修士2年 | 修士2年 | 学部2年 | 学部3年(2年編入) | 学部3年 |
| 年齢 | | 33歳 | 30歳 | 30歳 | 26歳 | 28歳 | 34歳 |
| 最終学歴 | | 大学・法学 | 大学・日本文学 | 大学・心理学 | 大学・日本文学 | 大学・経営学 | 大学・社会福祉 |
| 職歴 | 1 | 正社員・総合職 3年6ヶ月 | 正社員・事務職 1年10ヶ月 | 正社員・事務職 6年 | 正社員・営業職 2年 | 正社員・事務職 3年 | 正社員・専門職 4年6ヶ月 |
| | 2 | 派遣・事務職 1年6ヶ月 | 契約社員・事務職 5年2ヶ月 | / | / | / | 正社員・専門職 2年6ヶ月 |
| 学費負担者 | | 親 | 本人 | 本人 | 本人 | 親 | 親 |
| 生活費負担者 | | 奨学金・アルバイト・ 婚約者 | 本人 | 親 | 親 | 奨学金 | 親・本人 |
| 家賃負担者 | | 奨学金・アルバイト・ 婚約者 | 本人 | 親 | 実家居住 | 奨学金 | 親 |

な場所・状況を選んだ。

3. 分析方法

分析方法は、データに密着した分析から独自の理論を生成する質的研究法として考案された、グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた。グラウンデッド・セオリー・アプローチにはいくつか種類があるが、本研究では木下 (1999, 2003, 2005) による修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Modified Grounded Theory Approach, 以下M-GTAと記す) を取り入れた。M-GTAを用いた理由としては、主に次の4点が挙げられる。第1に、M-GTAが面接調査に適合的であるとされていることである。第2に、対象者の行動や認識などが変化していく過程といったプロセス性を持った理論を生成していくのに適していることである。第3に、データの切片化を行わないことによって、人間をできるだけトータルに扱え、人間的な生き生きとした部分を理解することが重視されていることである。第4に、分析をする研究者を前面に出し、データの解釈にはバラつきが生じることが自然のことと捉え、その自然さを活かすために、分析の体系化と一貫した手順を示し、より深い解釈につなげようと工夫されている点である。以上の理由からM-GTAを用いることで、キャリア変更の過程を明らかにできると考えた。

以下、M-GTAの分析の流れを説明する。はじめに、もっとも多様性がありそうな対象者を最初の分析対象とした。その一人分のデータを読み込み、分析テーマ (キャリア変更のプロセス) に関係がありそうな部分に着目し、対象者にとってそ

の部分はどんな意味があるかを解釈し、定義としてまとめ、その内容を短く説明して概念名とした。解釈の恣意性を防ぐため、その概念で説明できることは他にどのような場合があるかを考えたり、同じような例がその対象者のデータのほかの箇所や他の対象者のデータに豊富にあるかを見たりする類似比較を行った。その概念で説明できるデータが少ない場合、その概念は有効ではないと判断した。また、その概念とは反対の場合は何かを考え、対極例が豊富にあるかを見る対極比較も行った。このような比較分析を継続して行い、解釈、定義、概念名がデータに密着しているか (grounded on data) を検討した。解釈、定義、概念名が決まると具体例とともに分析シートに記入した。この過程で、別の解釈や他の概念との関連など考え付いたことも理論的メモとして分析シートに書きとめた。最初のデータ分析を終えた後は、対照的な対象者のデータで概念生成の作業を続けながら、先に作った概念の有効性の確認をおこなった。同時並行して、概念間の相互の関係を考え、カテゴリーという複数の概念のまとまりを作っていた。最後に、概念やカテゴリー相互の関係を検討し、概念図としてまとめた。この分析方法を表した概念生成モデルをFigure 1に示す。

結果と考察

M-GTAでは質的データの解釈をしながら分析を進めるため、分析結果と考察をまとめて報告する。データから作成した概念とその定義、また複数の概念のまとまりから生成したカテゴリーの一覧をTable 2に示した。また、最終的に複数の概

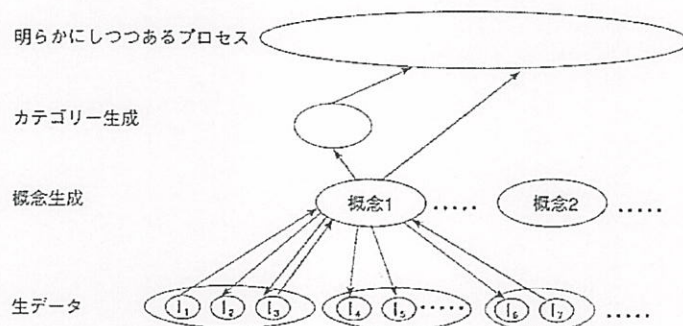


Figure 1 概念生成モデル (木下, 2003)

Table 2 概念、カテゴリーの一覧

| カテゴリー | 概念 | 概念の定義 | 発言者 |
|------------------|--------------------|--|---------------------|
| 〈現状に対する 不満足感〉 | 『やりたいことを見出せず』 | 前職に就く際、やりたいことがない、あるいはやりたいことがわからないまま就職した経験 | No.2, 3, 4, 5 |
| | 『会社・仕事に対する不満』 | 会社の給料などの待遇、会社の方針、仕事の大変さに対する不満の存在 | No.1, 4, 6 |
| | 『限界』 | 会社やその職業の現状から、その仕事を続けていくことへの疑問 | No.1, 3, 6 |
| 〈キャリアの選択〉 | 『なりたい職業の発見』 | 自分が本当にやりたかった仕事、一生やっていけると考える仕事を見出せたとの考え | No.1, 2, 3, 4, 5, 6 |
| | 『仕事と家庭の両立』 | 大学(院)卒業後、結婚をして、出産もし、仕事も続けていきたいという願望 | No.1, 2, 4, 5 |
| 〈原動力〉 | 『スキル志向』 | 自立して生きていくために、あるいは出産などで中断しても働けるように、手に職をつけたい、資格をとりたいという思い | No.1, 3, 4, 5, 6 |
| | 『職業観の変化』 | 給料、待遇重視から、やりがい重視への変化 | No.2, 4, 5 |
| 〈迷い〉 | 『つまずき』 | 大学(院)受験で失敗したり、再入学後に勉強の大変さを感じるなど、再入学をして専門職に就くという目標へ向かう途中で障害となるものにぶつかる経験 | No.1, 2, 4, 5, 6 |
| | 『金銭的リスク』 | 再入学をするにあたり払う金額、現在の収入がない状態に対して大変さ、厳しさを感じていること | No.1, 2, 3, 4, 5 |
| | 『結婚・出産に関する不安』 | 再入学したことによって、婚期が遅くなることへの不安、女性としてこの生き方でよかったのだろうかという思い | No.1, 2, 6 |
| 〈周囲の態度〉 | 『周囲の支援』 | 親からの金銭的援助などの物理的支援や家族・友人からの精神的支援の存在 | No.1, 5, 6 |
| | 『結婚へのプレッシャー』 | 親などからの結婚の心配をされること | No.1, 2, 6 |
| 〈納得感〉 | 『充実感』 | 現在、大学や大学院で勉強していることに対し、おもしろいとか、幸せであるとの感情 | No.1, 2, 3, 5 |
| | 『社会人経験に対する肯定的意味づけ』 | 社会で働いてきたことに対して、今、役立っている、あるいは将来専門職として働いていく上で役立つとの意味づけ | No.1, 2, 4, 6 |

念間の関係を解釈的にまとめた概念図、つまり分析の結果をFigure 2に示すと共に、ストーリーラインを作成した。カテゴリーは〈 〉、概念は『 』とし、面接データを「 」で示した。

1. キャリア変更のプロセス

初職の就職に際しては、就職難の中「何でも良かった」や「航空会社に行くみたいなのが、結構、王道みたいな感じで」というように、何をしたいかということほとんど考えないまま、または、就きたい仕事を考えたが決められないまま『やりたいことを見出せず』に就職していた。就職後、会社の経営方針や給料に対する不満や業務の大変さから『会社や仕事に対する不満』を感じ、このまま仕事を続けていくのは厳しいと考えるようになっていた。あるいは、会社や仕事に対し特に不満は感じなかったが、これで良いのだろうか将来に疑問を抱いたり、「若くないと…[中略]…そういうのってきっと通用しないんだろうなって思って」などと長期的に続けていくこ

との難しさを感じたり、行うことができる職務内容が限られていることに物足りなさを感じるなど、現状に『限界』を感じていた。このように『やりたいことを見出せず』就職し、その後『会社・仕事に対する不満』や『限界』を感じ、今の職業を続けていて本当に良いのだろうかという疑問を抱く〈現状に対する不満足感〉がキャリア変更の出発点となっていた。

現状に満足できない状況の中で、新たなものに興味を持ち、やがて仕事として考えるようになっていたり、やりたいことを模索する中で、過去に興味を持っていたものを仕事として考えるなど、『なりたい職業の発見』をしていった。とはいえ、やりがいのある職業に就くことを目指しつつも、将来展望としては『仕事と家庭の両立』を望む者がほとんどであった。現代社会においては未婚の者が増加しているが「結婚するつもりはない」としてその可能性をはっきり否定する人は少数派である(家計経済研究所, 2005)。多くの対象者は、結婚しても就労し続けるか、一旦退職した後再就

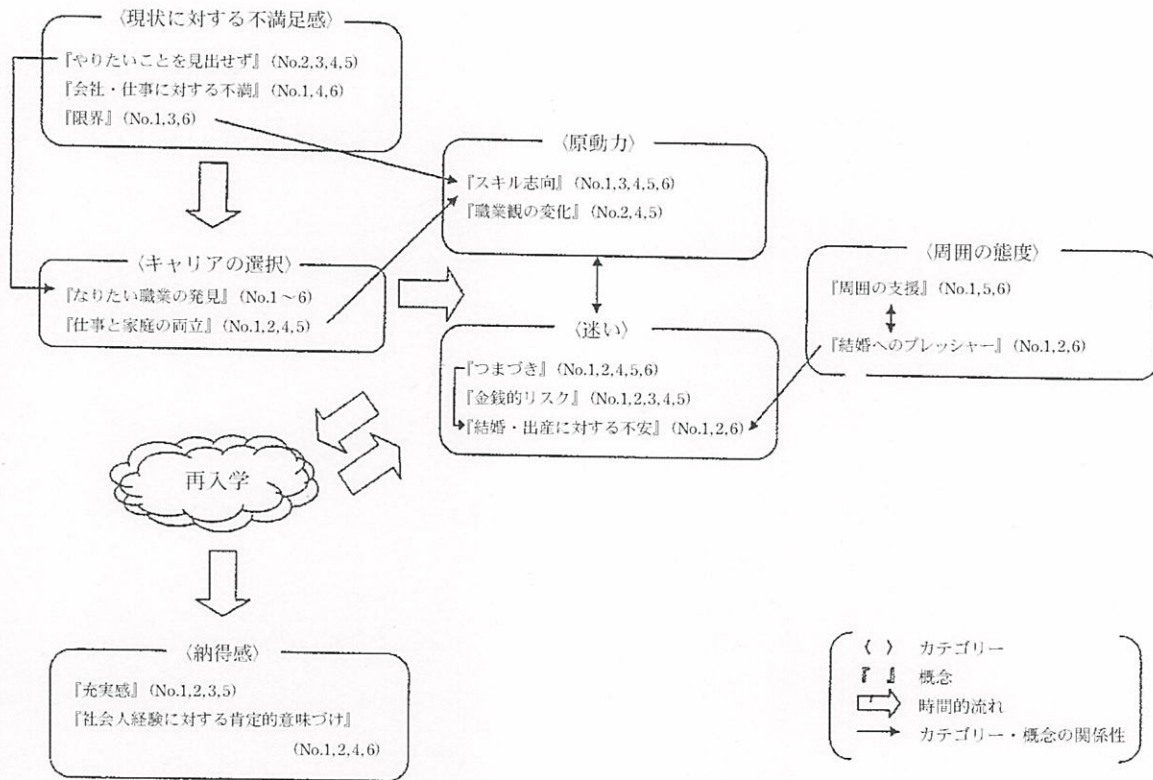


Figure 2 キャリア変更のプロセス

職するかは明確ではなく、そのときの状況次第と
 考えていた。このように現状に満足できない状況
 を出発点として、『なりたい職業の発見』、自分の
 望むライフコースである『家庭と仕事の両立』を
 考慮し、これらを統合して、その後のキャリアを
 具体的に描き始める〈キャリアの選択〉が行われて
 いた。

キャリア変更を目指す過程では、長く働き続け
 るためには資格が必要という考えから職業を選択
 したり、長期的に働くことができるというだけで
 なく、結婚や出産により中途退職しても再就職が
 しやすい職業が良いと捉えるなど、『スキル志向』
 が特徴的であった。また、給料や福利厚生が良い
 といった勤務条件の良さをから、自己成長でき
 る、やりがいがあるへと、職業観が変化してい
 いた。職業生活を通して自己実現をしたいという思
 いがあると考えられる。このように、新たなキャ
 リアの選択を後押しする『スキル志向』や『職業
 観の変化』が見られた。これらが、転職ではな
 く、職業と密接につながる資格の取得 (= 大学

(院) への再入学) の決意、そして再入学へと至
 る〈原動力〉となったと考えられる。

しかし、一方で、受験に失敗したり、学ぶ中で
 資格取得やその職業の適性への不安を感じ、本当
 にこれでよかったのか、この先やっていけるのだ
 ろうかという思いを抱くなどの『つまづき』を経
 験していた。また、仕事を辞め、新たに大学
 (院) に再入学するにはかなりの金銭的負担が強
 いられる。親の援助がある者でも、経済的に自立
 できない状態に不安を抱えるなど、ほとんどの者
 が何らかの形で『金銭的リスク』を感じていた。
 さらに30歳前後で学生に戻るにより、婚期
 を逃すのではないかという『結婚・出産に関する
 不安』も感じていた。これらの3つを〈迷い〉と
 してまとめた。また、こうした〈迷い〉は再入学
 後にも見られた。

さらに、親の金銭的援助や周囲の人の励まし
 が大きな支えとなるなど、物理的あるいは精神的な
 『周囲の支援』が再入学への後押しとなってい
 いた。その一方で、周囲からの『結婚へのプレッ

シャー]が、彼女らの『結婚・出産に関する不安』を増大させてもいた。これらの2つをまとめて〈周囲の態度〉とした。

再入学後は、多くの者が好きな勉強をしていることに大きな充実感を抱いていた。「学べる環境に入れる幸せというか、そういうのも、前に大学生だった頃に比べると、すごく実感しますね」という語りは、社会人経験をした者だからこその感想であろう。社会人経験を経て大学(院)に再入学することは一見、遠回りのように見える。しかし、社会で働いた経験があったからこそ今があるとか、基本的なマナーや人との接し方など、社会経験が現在の学生生活や今後の職業生活に役立つというように捉え『社会人経験に対する肯定的意味づけ』をしていた。本研究の対象者は心理や医療といった人と接する職業であることも影響しているだろう。このように再入学後は、再び〈迷い〉が生じることもあったが、学ぶことに『充実感』を感じたり、『社会人経験に対する肯定的意味づけ』を行い、〈納得感〉を得ていた。

2. キャリア変更と職業アイデンティティ

これまでキャリア変更に至るプロセスについて述べてきた。ここではキャリア変更を職業アイデンティティ形成の観点から検討する。

キャリア変更のプロセスは就職活動時に『やりたいことを見出せず』に就職したことから始まっていた。つまり、アイデンティティ・ステータスでいうところのモラトリアムあるいは既存の価値観を安易に受け入れた予定アイデンティティのまま、就職していたのである。そのため、対象者は就職してから改めて自分の適性や能力を見直し、自分が本当にやりたいことを探すこととなる。キャリアの変更にいたるこの過程は、まさに職業アイデンティティ探求のプロセスであり、自分探しのプロセスであるといえるだろう。必ずしも多くの人々が青年期にアイデンティティ達成というステータスを獲得するとは限らず(鱈ら、1998)、対象者は、青年期に職業アイデンティティを達成できなかった者たちであるといえるだろう。

岡本(2002)は、これまでの自分の生き方・あり方では自分らしくない、充足感がないという感覚、つまりアイデンティティの揺らぎ(危機)を体験した際、自分はこの生き方でよいのかという

自問自答、自己の見直しと模索を行うとしているが、対象者はまさに、このプロセスをたどっていると思われる。ある対象者は、「なんかね、なんというか、世間一般、周りの友達とかは、一流企業の人と結婚して、子どもを産んで、それなりの裕福な生活をしてたわけですよ。で、世間一般でも、そういうのが、なんか、勝ち組、みたいに言われてたじゃないですか。だから、それが幸せなんだと思ってたんですよ、私も」と語っていた。この対象者は周りの価値観に合わせて生きてきており、社会志向性の強い女性であったと思われるが、結局「アイデンティティを見出せなかった」と言う。そしてその後、親に反対されながらも大学に再入学するという生き方を選び、現在やりたいことをやっているという充実感を得ていた。これは、成人初期においては、個人志向性、つまり個性や独自性を尊重し、わが道を行くという生き方を貫く強さがアイデンティティと強い関連を持つことが示され、社会志向性はアイデンティティ形成にはつながりにくいという伊藤(1997)の知見を支持するものであるといえる。

Levinson(1978, 1996)は、30歳前後の時期を、青年期以降で築いた生活構造を再検討し、修正を行う時期、また迷いやストレスを伴った危機的様相をはらんだ時期であると定義し、「30歳の過渡期」と命名したが、まさに対象者にとって過渡期となったといえる。

続いて、彼女らの職業アイデンティティの特徴について検討する。「まあ今後、結婚とかはわかんないですけども、看護婦とかは、資格を持っていると、子どもとかで一時期家庭に入っても、また資格があることで、いろいろ違うこととかも出来ますし、あの、仕事は、結構、なくなることはないのかなっていう」とある対象者が語るように、彼女らは、自分の望む生き方に沿うような職業選択を行っていた。日本労働研究機構(2000)は、初職を継続している者は、「結婚・出産後も働ける会社だと思った」というようにその後のライフサイクルをかなり具体的に描いて就職先を選んでいることが明らかとなっており、女性にとっては、結婚や出産後も仕事を継続していくためには、それが実現しやすい職業を選択することも重要であると考えられる。さらに、「この職業は常勤もありますし、契約社員もありますし、パート

もあるので、そのときそのときのスタイルに合わせて仕事をしていけると思うし、資格を持っていれば、たとえば、結婚した相手が転勤になったとしても、その場所で仕事ができるのはいい」と、そのときそのときの状況に合わせて、柔軟に仕事をしていきたいという語りも見られた。松信(2001)は、依然として女性自身に、子育ては母親の役割という意識が強いことを指摘しているが、今回の対象者も同様に、家庭生活を優先しながら、仕事をしていきたいと考えていた。このように、女性の生き方が相手や状況に左右されやすいことを受け入れ、その中で自分のやりたいことを実現させていこうとする対象者の姿が浮かび上がった。職業アイデンティティの獲得とは、職業人としての自己が自他の承認を得られるか否かであり、職業選択を通じて自己を心理的・社会的世界に定位することである。松下(2002)は、より納得できる生き方を選択するためには、自分の人生についてできるだけ長い展望を持つとともに、柔軟な調整力を身につけることが重要であると指摘している。女性の人生は、夫や子どもなどの重要な他者に左右されやすく、自分の思い通りにいかないことも多い。その現実と理想とをできる限り折り合いをつけつつ、柔軟に生き方を選択していくこと、自分の志す人生あるいは自分のなりたい人生を長い視野のもとに捉えることが心の成熟にとっても不可欠な課題である。そしてまた、こうした柔軟に生き方を選択していくことは、今日の社会に適応的な女性の生き方といえるだろう。

3. キャリア変更をする女性の特徴

最後に、キャリア変更をする女性の特徴について考察する。まず、対象者が〈現状に対する不満感〉への対応策として、結婚を選ばなかった理由であるが、「先を長い目で考えた時に、仮に結婚ができたとしても、やっぱり、もしね、万が一上手いかなくなると、別れるとかいうことになってしまったときに、やっぱり路頭に迷うのは嫌だなんていうか、とかいうのがあって、やっぱり自分を養えるだけのものは自分で身につけておかないと、将来やっぱり何かに対応できないだろうなっていうか」というように、自立心を強く持っていたことが挙げられる。また、「やっぱりこう、自分のやりたいことを、仕事も、両立させ

ていきたいというか、仕事の内容も、お金のためとかではなくて、患者さんのためとか、自分の成長のために、それをこう、モチベーションとして、働いていく形になるんだろうな、っていうことは思います」というように、自己成長や人の役に立ちたいという思いを持っており、仕事を自己実現の手段と捉え、仕事に価値を置いていた。これらが、キャリア変更を促進する最も大きな要因であると考えられる。つまり、岡本(2002)の強い自立志向性を持ち、はっきりとした職業的自立を目指すという「個の確立志向型」タイプに分類される者であった。もちろん、彼女らが、もともと4年生大学を卒業している高学歴の女性であることも大きな要因であろう。

総合考察

本研究では、成人期に入って築いた最初の生活構造を修正して、第二の生活構造を作り上げる時期である「30歳の過渡期」(Levinson, 1978)に注目し、中でも30歳前後の女性に焦点を当てた。その中でも、キャリア変更のため大学(院)に再入学することを志し、正社員として勤務しながら退職して大学(院)に入学した未婚女性を対象として、彼女らのキャリア変更のプロセスはどのようにして進み、その過程を通して、どのように職業アイデンティティを形成していくのか、そして彼女らはなぜキャリア変更をするのかについて検討することで、現代女性の職業アイデンティティの形成のプロセスの一端を把握できると考えた。

再入学者のキャリア変更のプロセスは、『やりたいことを見出せず』、『会社・仕事に対する不満』などの〈現状に対する不満感〉から『なりたい職業の発見』、『家庭と仕事の両立』という理想とする生き方を具体的に描き、その後の〈キャリアの選択〉が行われる。そして、その後の再入学に至る過程では、ずっと働いていくために手に職をつけたいという『スキル志向』などが〈原動力〉となっていた。しかし、一方で、大学(院)入試に不合格となるといった『つまずき』や『結婚・出産に関する不安』から、再入学への〈迷い〉が生じていた。〈迷い〉ながらも、〈原動力〉が上回って、再入学に至るのである。また、その過程

において、対象者は『周囲の支援』に助けられる一方、周囲から『結婚へのプレッシャー』を与えられて〈迷い〉が生じることもあり、〈周囲の態度〉に影響を受けていた。再入学後は、再び〈迷い〉が生じることもあったが、現在、大学で勉強していることに対して、『充実感』を感じたり、『社会人経験に対する肯定的意味づけ』を行い、〈納得感〉を感じていた。

このプロセスは、職業アイデンティティ探求の過程であると考えられる。対象者は、〈現状に対する不満感〉を感じ、つまり職業アイデンティティの揺らぎ（危機）を経験し、自分はこの職業を続ける生き方でよいのかと自問自答し、自己の見直しと模索を行っていくというプロセスをたどっていた。また、再入学前には、『結婚・出産に関する不安』など、様々な〈迷い〉が見られ、それは再入学後にも見られるものの、再入学したことに対しては多くの者が〈納得感〉を感じていた。これは、成人期の発達を、人生の岐路に遭遇するたびにこれまでの自己のあり方や生活構造の破綻に直面し、一時的な混乱を経て、再び安定した自己のあり方が形成されていくという「危機⇒再体制化⇒再生」の繰り返しのプロセスであると捉える岡本（1994, 1997）や南（1995）の見解を支持するものであろう。また、現在〈納得感〉を得ている対象者は、キャリア変更の成功例であるといえるだろう。この成功には、しっかりと自己の見直しを行い、将来展望をも描いた〈キャリアの選択〉をしていることが大きく貢献していると思われた。

また、対象者は、仕事を自己実現の手段と捉え、仕事に価値を置いていた。こうした職業観が、キャリア変更を促進する大きな要因であると考えられた。しかし一方、仕事だけでなく、結婚や子育てにも価値を置き、仕事を一時的に中断したり、パートや非常勤で働くなど、状況に合わせて柔軟に仕事をしていきたいと考えていた。それは、対象者が目指す職業が、中断しても比較的復帰しやすく、またパートや非常勤といった形で仕事ができることと関連しているであろう。そしてまた、それは望むライフコースを実現できるような職業を選んでいても考えられる。つまり対象者にとって、キャリア変更は自分の望むライフスタイルを手に入れる手段とも捉えられる。

援助への提言

これまで、キャリア変更のプロセスを見てきた。キャリア変更のプロセスは最初の就職活動でやりたいことを見出せなかったことから始まっている。これは、中・高等学校時代に現実的な職業をイメージできず、大学進学後も職業イメージが拡散したまま、就職活動に突入したことが一つの原因であると思われる。その背景には、それまでに将来の生き方を考える機会があまりなかったという現状があった。近年、中・高等学校では、職場体験などを導入し、大学では、1、2年生から就職に関するガイダンス等を行い、企業もインターンシップを導入するなど、早期からのキャリア教育が行われ始めている。しかしながら、わが国のキャリア教育は端緒についたばかりであり、現段階では、大学生は職業生活における展望を十分に持ちえていない。今後、キャリア教育の更なる充実が求められるだろう。

また、再入学後の現在、〈納得感〉を感じている対象者は、キャリア変更の成功例であると思われる。そこで、納得のいくキャリア変更をするには何が重要であるかを考えていきたい。ある対象者は、以前転職した際、憧れの会社に入社した。しかしながらその後、「やりたいことじゃないなって思っ。て。[中略]アイデンティティを見出せなかったんです。」という。そして今回は、自分が何をやりたいのかをしっかりと考え、さらに将来展望も考えた上で再入学を決め、〈納得感〉を得ていた。また、前職に関して給料・福利厚生等のよさを重視していた者が見られたが、こうした条件を重視した場合、仕事で充実感を得ることは難しいと思われた。よって、自分にとって職業、仕事を持つことがどのような意味を持つのかを明確にする必要がある。そしてまた、自分、仕事、家族という3つの生活領域のそれぞれに自分自身をどのようにコミットさせるのかを決めた上で、キャリア選択をすることがその後納得のいく人生を歩むために重要であると考えられる。また、対象者には、場合によっては、仕事を一時中断したり、パートや非常勤で働くなど、状況に合わせて柔軟に仕事をしていきたいという考えを持っているという特徴があった。本来であれば、社会が、女性が家庭と仕事の両立を実現できるよ

うなしくみをつくるべきであるが、現時点では、このように柔軟な構えを持つことも、社会に適応していくために必要であることは否めない。こうした現実を把握し、自分の生き方をしっかりと描いた上で、キャリア選択をしていけるよう、援助していくことが求められている。

さらに、ある対象者に「やっぱり今後、結婚と、やっぱり出産っていうのが、あると思うんですけども、私は、専業主婦には向かないと思うので、結婚しても、出産しても働いていきたいと思ってるんですけども、パートナーがこう、それにこう、理解を示してくれないと、難しいと思うし…」という語りが見られたが、このような状況に遭遇した際、ただ相手に合わせるのではなく、配偶者や恋人、あるいは家族等と自分の将来を建設的に納得できるように話し合っていくことが、その後、充実した人生を歩むためには望ましいと思われる。そのためには、アサーティブなコミュニケーション能力を身につけることが必要であり、女性のキャリア教育（開発）には、こうしたトレーニングを行うことも重要であろう。

そしてまた、入学後に『つまずき』を経験した者は、「やっぱりこう、勉強していくにつれて、作業療法の、こう、自分がこう、想像していなかったところが、見えてきたりとかするとき、自分が向いてないんじゃないかって思うことが、多かったりするんで…」と語っており、職業に対する理解不足が見受けられる。よって、悔いのない選択をするためには、その職業に対する理解を深めることが非常に重要である。臨床家も、キャリア選択に悩んでいる者を援助する際には、職業理解を促していくことが必要であろう。

今後の課題

本研究では、非常に限定された対象を扱ったため、対象者を集めるのに苦労し、理論的飽和に至ったかどうかを確認することができなかった。そのため、今後はもう少し対象者を増やし、今回の結果を確認するとともに、より明確に整理することが必要である。また、今回は、キャリア変更の成功例を取り上げたが、実際にはキャリア変更が上手くいかず、不本意にも転職を繰り返す者も多い。そのため、今後は転職を繰り返す女性に焦

点をあて、キャリア変更の際、成功するために何が重要であるのか、さらにどのような援助が必要であるかを検討していきたい。

また、今回、ある対象者の「私の場合は、親の経済的な援助の話だったり、彼氏の大丈夫だよ、っていうような言葉だったりとか、指導教官の《 》大学でやっていけば大丈夫だよみたいな感じで、さらって言ってくれたりとか、後押しがあってやっと安心感が得られたぐらいなんですよね。私の中でぐずぐず考えていたら、絶対に、解決できないっていうか、不安が膨らむばかりで、この先、私、女として大丈夫、とか、そういうことばかりたぶん考えてて、ぐるぐるしていたと思うんですけど、結構そこら辺は、そう言ってくれた周りの言葉が絶対強かったですよね。」という語りが印象的であった。この対象者は、周囲に支えられていると強く感じており、また周囲の反応（態度）に非常に影響を受けていると思われた。先行研究においても、女性のアイデンティティは他者との関係性の中で発達していくという指摘はしばしばなされてきた。杉村（1998）もまた、女子大学生を対象とした研究において、自己の欲求・関心のみではなく他者の意見・期待も考慮したり、相談や検討といった形で他者を利用したり、自己と他者の視点の間の食い違いを交渉などの手段で解決しながら、アイデンティティを形成していくと指摘している。今後、キャリア変更の際、他者が与える影響についてさらに検討していきたい、援助に役立てたい。

そしてまた、卒業後どのような変化が見られるのかを研究する必要がある。再入学はそれがゴールではなく、その後、職に就き実際に働くことを目的としているのであり、そこに至る過程が本来最も重要であると思われるからである。さらに、今後、結婚等を経験する中で、どのような悩みを抱え、実際にどのようなライフコースを選択していくのかといった縦断的な研究を行うことも重要であろう。

引用文献

福田範子・松島恭子（2006）. 現代成人女性のアイデンティティ確立の臨床心理学的考察～「30歳過渡期」の心理学的特徴～. 大阪市立

- 大学生生活科学部児童・家族相談所紀要, 23, 27-36.
- Flick, U. (1996). *Qualitative Forschung: Theorie, Methoden, Anwendung in Psychologie und Sozialwissenschaften*. Hamburg: Rowohlt (ウヴェ・フリック 小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子(訳)(2002). 質的研究入門—〈人間の科学〉のための方法論 春秋社)
- 伊藤美奈子 (1997). 個人志向性・社会志向性から見た人格形成に関する一研究 北大路書房
- 家計経済研究所(編)久木元真吾・村上あかね・溝口由己著・野沢慎司・重川純子(2005). 若年世代の現在と未来 家庭経済研究所.
- 木下康仁 (1999). *グラウンデッド・セオリー・アプローチ* 一質的実証研究の再生. 弘文堂.
- 木下康仁 (2003). *グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践* 一質的研究への誘い. 弘文堂.
- 木下康仁 (2005). 分野別実践編. *グラウンデッド・セオリー・アプローチ*. 弘文堂.
- 厚生労働省統計情報部 (2010). 平成21年人口動態統計月報年計(概数)の状況.
- Levinson, D. J. (1978). *The seasons of a man's life*. New York: Alfred A. Knopf. (レビンソンD.J. 南博(訳)(1992). ライフサイクルの心理学上・下 講談社)
- Levinson, D. J. (1996). *The seasons of a woman's life*. New York: Alfred A. Knopf.
- 松信ひろみ (2001). 女性の職業別に見た結婚・出産・子育てに関する意識 職業によって異なるライフコース. 共通しているのは「子育ては母親の役割」. こども未来, 363, 10-12.
- 松下美知子 (2002). おとなとしての自分を求めて—若い成人期. 岡本祐子・松下美知子(編)新女性のためのライフサイクル心理学. 福村出版, pp.126-133.
- 南博文 (1995). 人生移行のモデル—人間発達のドラマをどう見るか. 南博文・山田洋子(編)講座 生涯発達心理学第5巻 老いることの意味—中年系・老年期. 金子書房.
- 日本労働研究機構(編)(2000). 高学歴女性の労働力率の規定要因に関する研究. 調査研究報告書, 135.
- 岡本祐子 (1994). 成人期における自我同一性の発達過程とその要因に関する研究. 風間書房.
- 岡本祐子 (1997). 中年からのアイデンティティ発達の心理学. ナカニシヤ出版.
- 岡本祐子 (2002). アイデンティティ生涯発達論の射程. ミネルヴァ書房.
- 杉村和美 (1998). 関係性の観点から見た女子青年のアイデンティティの形成: 関係性の観点からのとらえ直し. 発達心理学研究, 9, 45-55.
- 鱧幹八郎・宮下一博・岡本祐子(共編)(1998). アイデンティティ研究の展望V-1 ナカニシヤ出版.

謝 辞

本稿は、修士論文として提出されたものを、修正・加筆したものです。面接調査にご協力くださいました皆様に心より感謝申し上げます。

(よしかわ ひろみ 特定非営利活動法人メンタルケア協議会)
(たなか なおこ 昭和女子大学大学院生活機構研究科)